

第1章 事業の総括評価

趣 旨
評価結果
総括評価



事業の総括評価 令和元年度 国際社会青年育成事業

I 趣旨

国際社会青年育成事業は、日本と諸外国の青年との交流を通じて、青年相互の友好と理解を促進し、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会で指導性を発揮できる青年を育成することを目的として実施している。令和元年度（第1回）は、オーストリア共和国・リトアニア共和国、メキシコ合衆国・ペルー共和国、フィリピン共和国・ベトナム社会主義共和国の3地域・6か国を相互交流の対象国として実施した。

また、日本青年の育成の観点から、内閣府青年国際交流事業は「世界各国の青年との交流を通じて相互の理解と友好を促進し、国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と次代を担うにふさわしい青年を育成する」ことを共通の目的として掲げ、事業参加によりコミュニケーション力や異文化対応力等の能力向上が図られることをねらいとしている。

以上の目的を達成するため、国家及び地方行政組織等への表敬訪問、同世代の青年との合宿型ディスカッションプログラム、首都に加え複数の地方都市における地元青年との交流等、様々なプログラムを実施しており、特に日本青年の派遣事業については、人的交流の重視を基本としつつ、相

手国の多様性を吸収するとともに日本文化の発信が可能な内容に組立てるべく、交流対象国に対して要望を出しながら、毎年見直しを行っている。

今回、本年度事業の成果を測るため、日本参加青年及び外国招へい青年（6か国）全員を対象として事業終了時にアンケート評価を行うとともに、日本参加青年に対しては、事前研修及び帰国後研修時に、能力向上に関する自己評価の変化について比較調査を行った。

事業終了時のアンケート評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。また、日本青年の自己評価の変化に関する比較調査については、他の調査との比較の観点から6段階評価（評価の高い方から6～1）を基本とした。

※本報告書では、日本青年派遣事業に焦点を当てて評価する。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「第3章 資料編」参照。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度

①日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の94%が5段階評価の4（深まったと思う）以上を付け、極めて高い評価であった。

②日本と交流相手国の友好の促進 [1-(8)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の全員が5段階評価の4（深まったと思う）以上を付け、極めて高い評価であった。

③プログラムへの満足度 [2-(1)]

訪問国プログラムの内容についての全体評価は、日本参加青年の89%が5段階評価の4（良かった）以上を付け、高い評価であった。特に「地元青年との交流

[2-(4)] は日本参加青年の89%、「ホームステイ [2-(7)] は日本参加青年の80%が5段階評価の4（良かった）以上を付け、比較的評価が高かった。

④社会貢献活動への意欲 [1-(9)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか」との問いに対して、日本参加青年の94%が5段階評価の4（ある程度意欲を持った）以上を付け、非常に高い評価であった。そのうち半数を超える51%が5（十分に意欲をもった）であり、意欲の向上に強い影響を及ぼしたと考えられる。

⑤事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(10)-1]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の97%が5段階評価の4（役立つと思う）以上を付け、極めて高い評価であった。

また、そのうち60%が5(とても役立つと思う)であり、本事業が参加青年が自らの将来について考える大きなきっかけになったことが見て取れる。

⑥事業参加による人生などについての考え方の変化

[1-(6)]

「この事業への参加を通じて、人生、社会などについて

での考え方が変わったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の83%が5段階評価の4(大きく変わった)以上を付け、高い評価であった。本事業が参加した青年の価値観の形成に少なからぬ影響を与えていることがうかがえる。

2.日本参加青年の成長(自己評価の向上度)

本事業の日本参加青年に対し、事前研修時と帰国後研修時での能力の成長の変化について6段階(6=十分備えている、5=備えている、4=ある程度備えている、3=あまり備えていない、2=備えていない、1=全く備えていない)による比較調査を行ったところ、次のような結果になった。

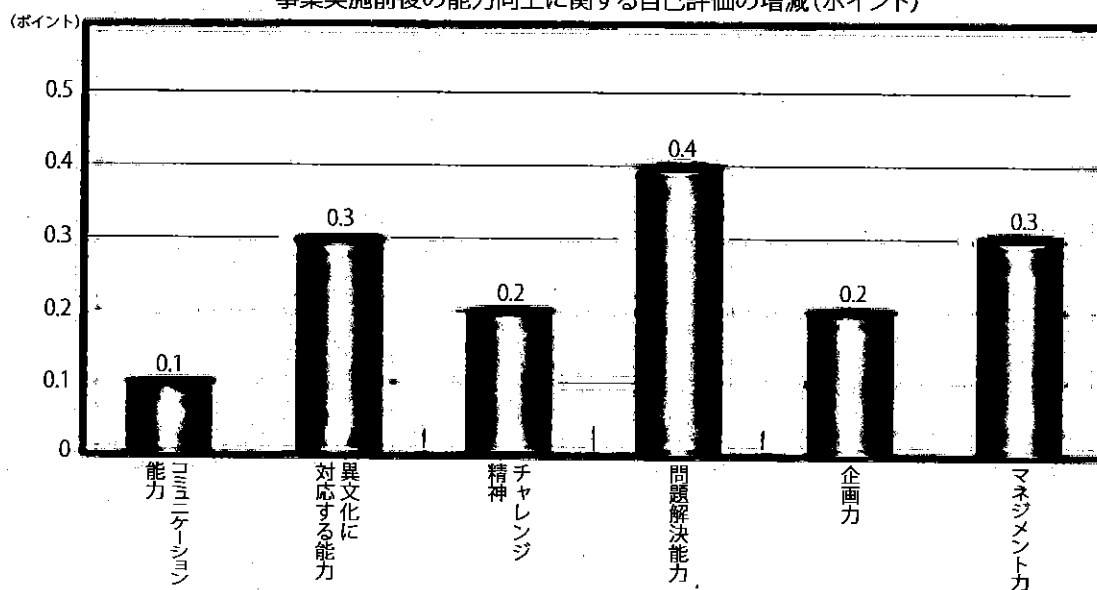
- 「コミュニケーション能力」については、
4.4から4.5となり、0.1ポイントの増。
 - 「異文化に対応する能力」については、
4.8から5.1となり、0.3ポイントの増。
 - 「チャレンジ精神」については、
4.6から4.8となり、0.2ポイントの増。
 - 「問題解決能力」については、
3.9から4.3となり、0.4ポイントの増。
 - 「企画力」については、
3.9から4.1となり、0.2ポイントの増。
 - 「マネジメント力」については、
3.7から4.1となり、0.3ポイントの増。
- (ポイント数については、小数第二位を四捨五入)

全体としてポイントの変化は小幅であったが、全項目で向上が見られた。

最も伸び幅が大きかったのは、「問題解決能力」である。事業実施前後で、「十分備えている」が0.0%から8.6%に、「備えている」が14.3%から34.3%にそれぞれ大幅に増加した。これは事業中に直面する派遣団内での意見の相違への対応や、訪問国活動中の突発的な事象への対応が経験として身についたことを示していると考察できる。

「異文化に対応する能力」は、事業実施前後で、「十分備えている」が11.4%から31.4%に増加、「あまり備えていない」が5.7%から0.0%に減少した。これは異なる風土や文化を持つ2か国を訪問し、現地の人々との交流を重ねることで自らの対応力を確認できたことによるものと考えられる。歴史を体感する遺跡の訪問や現地の方々普段の生活を体感するホームステイなどによって、それぞれの国の姿を直接に感じることは、訪問国に対する理解を深めたと言える。また、帰国後に行われた国際青年交流会議で、訪問国以外の招へい青年ともディスカッションを行ったことも、多様な文化のあり方を理解することに大きく影響しているであろう。

事業実施前後の能力向上に関する自己評価の増減(ポイント)



「チャレンジ精神」についても、事業実施前後で、「十分備えている」が22.9%から31.4%に増加、「あまり備えていない」が14.3%から2.9%に減少した。そもそも本事業に参加を希望する参加青年は比較的チャレンジ精神が旺盛であると言えるが、訪問先での質疑やディスカッションなどの現地青年との交流の場面で様々な挑戦を積み重ねることを通じて、自らのチャレンジ精神をより強く実感することができたのではないだろうか。

「コミュニケーション能力」については、全体としては向上しているものの、一部、事業実施前より低い評価をした参加青年もおり平均のポイントの伸びが少なかった。これは訪問国活動や国際青年交流会議で外国青年のディスカッション能力、言語力の高さを目の当

たりにしたことが原因と思われる。しかし、事業終了時のアンケートでは言語力を高めたいといった前向きな記述が見られ、参加青年の今後の成長を期待できる点でもある。外国青年とのディスカッションについては、明確なゴール設定など改良のための提案もあり、それらを反映させプログラムを改善することで、参加青年のコミュニケーション能力向上に一層資することができると考えられる。

Ⅲ 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]との問いに対して、日本参加青年の94%が5段階評価の4(良かった)以上を付けた。コメントを詳細に見ると、2か国訪問によるスケジュールのタイトさを指摘する声、ディスカッションの一層の充実を求める声などもあり、次年度以降に改善の余地はあるが、全体としては高い評価が得られたと言える。

日本参加青年からは「国際社会に貢献したいという思いが芽生え、社会問題の解決につながるような仕事をしたいと思うようになった」など、自身の成長についてのコメント、「新たな人との出会いがあり、日本には感じるこ

とのできないような疑問点を見出すことができた」など、プログラム内容を評価するコメントが多く寄せられた。そのような諸点を勘案してみると、派遣された国の青年との交流や産業、文化、教育施設訪問等各種の活動を通じて、両国青年相互の理解と友好の促進を図るとともに、参加青年の成長に良い影響があったものと結論づけられる。

以上、参加青年の評価結果から、本事業の目的である「日本と交流国の相互理解と友好の促進」に関して、交流国及び国際社会への理解の深まりを自覚し、かつ、青年自身の事業参加による効果の認識を示すなど、十二分な成果を収めたと評価することができる。